

時間・空間・表象

—歴史の民主主義のために—

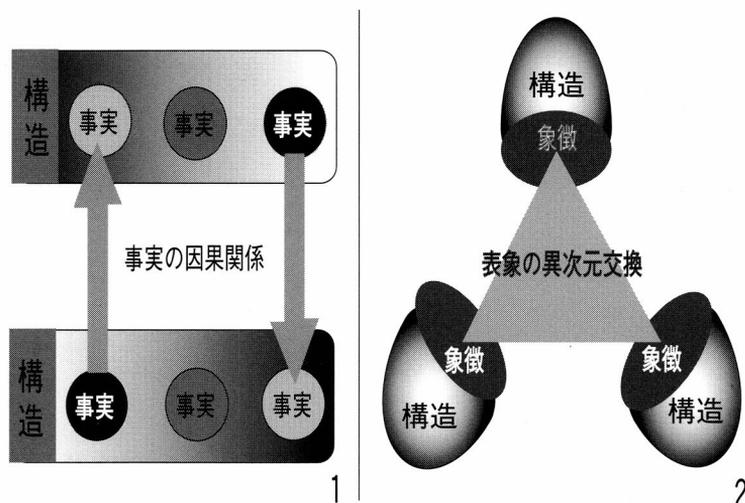
河野一隆

歴史の価値とは、歴史の不可知によって決められる。

1. 伽藍とバザール^(注1)

歴史は伽藍に似ている。それは、精選された部材を使用してあたかも壮大な建造物を築くように、歴史家が吟味を重ねた「歴史的事実」という言説を組み上げて、世界史という伽藍を構築し、その中で歴史的な現在をわれわれは生きるのである^(注2)。その存在は意識によって規定されるが、意識を規定するものは歴史をもその一部に内包する集合的な構造である。厳密には、主体性を保持した人間が認識する構造であり、それは歴史家とて例外ではない。したがって、歴史とは歴史家が現在の主体的環境を通じて過去を知覚するわけであるから、「すべての歴史は現代史である」こと^(注3)になるのである。さらに歴史家が主体的な営為によって解明した「歴史的事実」の蓄積は、歴史を説明可能な体系と見なすことによって、現在を説明し続ける科学としての歴史が位置づけられることになったのである。有力な歴史の説明原理であった唯物史観が崩壊して久しく、その反動としての還元主義的・認識論的な歴史観もみられる。結局のところ、私達は過去を経験的に知ることはできないということに行き着くのだろうか。このような、歴史に対する無力感の背景には、歴史を伽藍と見なしてきたわれわれの意識に由来するところが大きいように思う。前世紀から営々と築き上げてきた科学的な歴史という共同幻想が、今、音をたてて崩れ落ちようとしている。その廃墟に絶望に打ちひしがれて、ただ、たたずんでいるのが現状である。あらたな伽藍＝科学的なパラダイムの建設は遅々として進まない。その中で、体系的な歴史観の必要性が強く待望されながらも、私達は十分な手を打つことができないのか。

いや、そうでない。カードを切りなおすべき時期^(注4)に来ているのだ。はたして伽藍は必要だろうか？ 主導的な言説をパラダイムとしてまつりあげ、その土台に多種多様な言説を組み込んで伽藍を作る。それが、現在の説明原理として適合しなければうち捨てられる。このような、歴史観自体が今世紀の科学的な歴史観が蓄積してきた壮大な誤謬の帰結だったのでなかろうか。荘厳な伽藍のような体系的な歴史を探し求める思惟は、それがいかに主体的な営みであったとしても、認識のための道具からパラダイム化した言説になった時



第1図 歴史の二形態(1. 伽藍としての歴史 2. バザールとしての歴史)

点で生命を失う。そうではなく、歴史を現在の説明原理として位置づけるならば、生きるために挑戦と応戦を繰り返す、われわれの意識自体に存在理由を求められるべきものであろう。つまり、歴史家以外も含めた、人間の主体的営為の有機的な総体として歴史を捉えなければならないのである。

これからの歴史が目指すものは、伽藍ではなくバザールでありたい。バザールでは多くの人々が入り出し、様々な商品を交換する。バザールごとに異なった規則があるが、生きるために必要なものはすべてそこに揃っており、意図に応じて一定の規則を遵守すればそれを手に入れることができる。いささか比喩的であるが、伽藍とバザールの歴史観を图示したものが、第1図である。伽藍としての歴史観とは、直線的時間観念に支配された、現在を帰着とする定向的な発展過程を前提に、意識的に選択・抽出された歴史的事実の変化過程を構造として捉える。したがって、構造と構造との有機的な関連は、歴史的事実間の因果関係として説明されるために、本来的に歴史とは事件史の集合体に過ぎないことになる。これに対し、バザールとしての歴史とは、直線的な時間観念に支配されない構造であり、集合的表象としての象徴を導き出す。その象徴間の有機的な関係を比較の方法で見出していくことによって、歴史とは象徴の連続体として意味を持ち得、何度も読み直されるべき対象となる。かつて文化構造論によって文化の全体的認知を提唱した時に、表象／象徴の持つ意味を十分に吟味できなかった。本稿では、この問題意識に立脚して歴史の構造分析について再考したい。

将来の歴史研究では、多種多様な歴史の共存を認め、その交換手段と規則とを決めていくことが、歴史家の課題の一つになっていくであろう。それが、体系的な歴史に依存しな

い、歴史の民主化を進めていかねばならない所以である。しかし、歴史の民主主義を議論する場合には、実在としての歴史の研究を如何にとらえるかが整理されていなければならない。この問題を次節以下で展開し、最後に歴史の価値について言及してみたい。

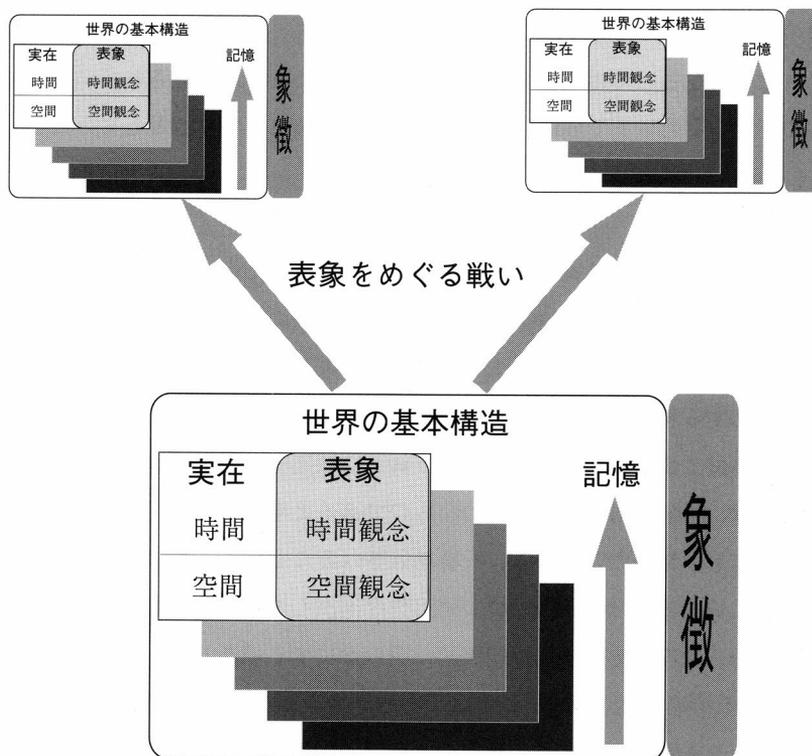
2. 歴史の死滅

歴史の民主化と言えば、日本の戦後歴史学が歩んだ道程でもあった。^(注7) 皇国史観に彩られた戦前の歴史が、国民的歴史学運動^(注8)を中心として、民衆の手に渡ったとき、歴史の死滅は新たな意味を持つことになった。つまり、学びの対象としての歴史事実の探求であり、唯物史観を背骨とする科学的論理構造に裏打ちされた歴史的過去の創造であり、戦後歴史学における歴史の民主化とは、唯物史観という新たな歴史主義による専制を意味していたのである。これは、科学の構造を弁証法的なものであると考えることで、科学の構造と歴史の構造とが相似形に見えたことから、一層補強されることになった。^(注9) 歴史の弁証法的構造は、科学同様に知識の集合体としての共同幻想を創出した。経験主義的な学問の体系による研究の進展が、次の歴史的事実を経験的に明らかにするであろうし、その蓄積によってやがては、過去の精確な復元が可能になるであろうといった不可逆的發展の幻想である。しかし、研究をいくら詰めてみても、歴史の実体は確固たるものとして獲得することはできなかった。なぜなら、歴史は科学ではなかったからである。それは人間の行動が法則的な解釈にそぐわなかったという意味ではなく、科学の持つ論理の刃が人間社会を分析対象化・分節化してしまうことで、歴史学が本来的に持っていた総体としての認識を自ら放棄してしまっただけである。^(注10) 歴史を自省的に捉えることで、それが気付かれるようになった。その意味で、科学的歴史の導入は、言うなれば歴史の死滅を意味していたのである。歴史学の民主化とは皮肉にも、歴史主義による専制を生み出し、現在の歴史に対する虚無感・体系化への意志の欠如は、自省的なものである以上に、生き生きとした歴史に対する感性と自信とを喪失させることに繋がったのである。

3. 歴史の基本構造分析

それでは、歴史の再生を意図して以下に展開する議論のために、歴史の基本構造を分析するための作業概念とその規定を試みたい。

世界を構成する基本構造は、任意の一局面を切りとってみると、実在する時間および空間と、それを表象する時間意識および空間意識から構成される。この一方で、表象するということは、目に見えないもの、通常は隠蔽されるべき主体的認識の荒ぶる力を記号化^(注11)して、対話のための道具とする作用である。この主体的認識の暴力的作用とは、絶えざる疎



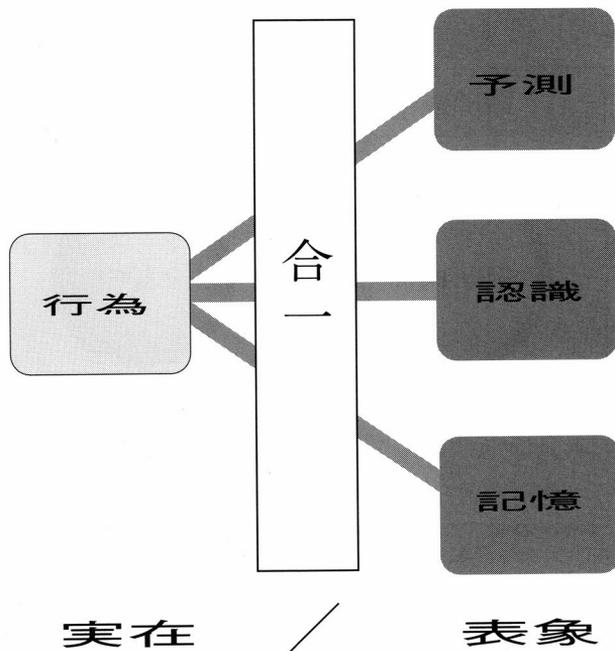
第2図 歴史の基本構造の分析

外化を抑制するために、排除の論理により主体的認識が社会的自己同一性を獲得しようとするための不断の働きを指す。^(注12)このために、本源的に人間は個へと果てしなく分裂するが、表象によってかろうじて相互に繋ぎとめられていて、社会や文化などの自然に適用するための手段を創出しているのである。この反面で、実在としての時間と空間は、その中で現存する人間には表象の働きを通じてしか認知されない。このために、時間と空間の観念を創造することこそが人間の存在を規定するのである。つまり、時間観念と空間観念は、人間社会が自然的に獲得していたものではなく、人間が世界で生存するために、世界の規定的な構造によって意識的に仮設されたものであった。この実在と表象とによって構成される構造は、その累積によって、記憶という新たな表象を持ちうるが、実在的な記憶が存在しないことは、客観的な歴史が存在しないことと同義である。すなわち時間観念・空間観念・記憶は、実在としての世界を切りとって、経験的に認識するための道具にほかならない。これらにより切り取られた世界の基本構造の総体的な認識が、象徴である。象徴は、歴史家個人によって主体的に認識されるものであるが故に、相互に通訳不可能なものとなる。歴史が象徴の連続体である所以は、以上に述べた歴史の基本構造に帰着している。この一

方で、表象が暴力を隠蔽したものである以上、表象をめぐる戦いも不断に発生する。この戦いによって構造は硬直化し、その弁証法的作用によって脱構築される。脱構築とは、構造を破壊し否定することではなく、構造の表象／象徴を変換することで構造を再生することである。したがって、表象をめぐる戦いは実在としての人間存在をも脱構築させることになるのである。人間は歴史の中でその戦いを何度も経験しており、今、まさに何度目かの戦いの渦中にある。これを図式化したものが第2図である。

個の人間の、主体的認識の集合体が、象徴の集合体である歴史にいかにか転化するのか。それは主観的で直接的な経験を表象化することで他の人間へと伝え、逆に他の表象を理解可能な記号として受容する構造に由来する。それを可能とするのが理性の働きである。理性は、感覚的理性と分析的理性とによって、表象に過剰の意味を加えることになる。すなわち、感覚的理性とは主観的で直接的な経験からの類推思考であり、分析的理性とは直接的な経験から抽象した法則(注13)に基づく演繹思考である。

実は、個としての人間の行為が歴史へと転化するメカニズムがそこに潜んでいる。行動論的に言えば、主体的な認識がただちに自己を取り巻く実在の世界に対する行為になるわけではない。分析的理性によって、認識と行為とは截然と区別されている。その両者を繋ぐものこそ、感覚的理性から発生した表象であり、それは記憶の過去の世界、認識された表象の世界、予測される将来の世界と、世界内存在としての、実在の行為の世界とを合一している(第3図)。この合一こそが歴史化の作用であり、ある意味では歴史とは目的論的に成立していると言えよう(注14)。しかし、その結果として、認識の不整合構造がそこに必然的に発生する。すなわち、感覚的理性と分析的理性との弁証法的な不断の葛藤は、集合表象を生み出すことで象徴化するが、そこには世界の暴力・非暴力的な強制作用を、表象によって隠蔽するという本源的矛盾が内在化されているのである。

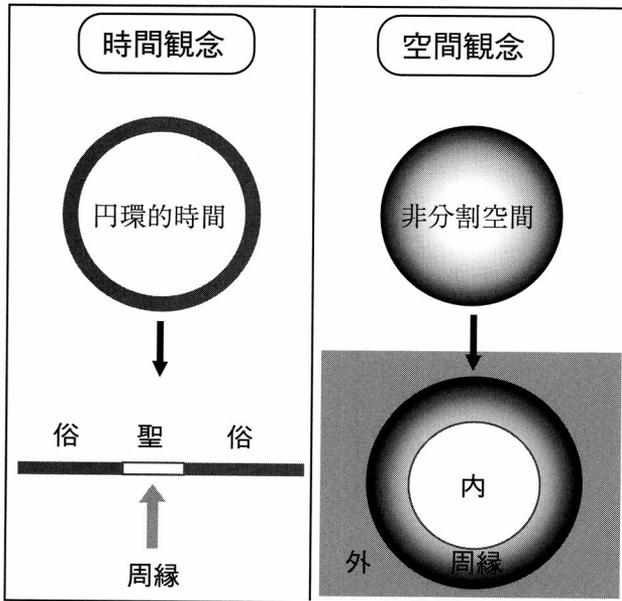


第3図 異次元交換による実在と表象との弁証法的合一構造

この矛盾が爆発的な形で噴出することを回避するために、表象は交換されねばならないのだ。その交換とは、同次元の世界内の交換と同時に異次元^(注15)の世界間の交換を意味しており、時には先述した表象をめぐる戦いも一種の交換である。また、交換される表象は物質的なものであると同時に非物質的なものもある。例えば、創世神話を物語るという行為は、記憶の世界を認識の世界を通じて、呪術的な行為は予測の世界を認識の世界を通じて、それぞれ実在の行為の世界に転化するものであり、創世神話・呪術がそれぞれ表象である。すなわち、表象とは非暴力的強制力であって、表象の異次元交換こそ支配／規範の根元なのである。

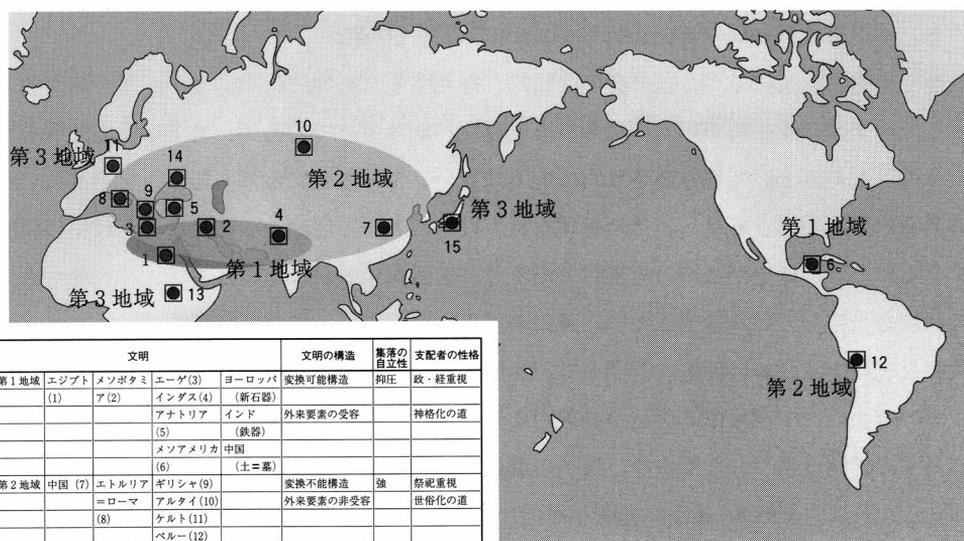
4. 表象の王権

表象の異次元交換が、世界の支配／規範を創出する事例として、王権の誕生について言及したい。王権の誕生が世界の脱構築であることは言うまでもなく、分析的理性の働きによって、その時間・空間観念が更新される。時間観念の更新とは、王墓で執行される諸儀礼を世界の通過儀礼として記号化し、円環的時間観念を不可逆的に線分化(ライン化)することである。したがって、王墓とは物質的あるいは非物質的な表象を統合する誇大化した儀礼そのものであり、その成立に先行して、物質的表象(威信財)の、競覇的で、ある意味では破壊的な饗宴儀礼が現象化するの自然なことであり、威信財経済が王墓成立の必要条件となる所以である。一方、空間観念の更新とは、人間一般を抽象化し、記号化することによって、世界内的存在である個としての自己を相対的に記号化し、空間観念を区画化(トポロジー化)することである。そのために、観念の更新のための仕掛けを人間は創出せざるを得なかった。つまり、時間を支配する舞台装置として王墓を、空間を支配する舞台装置として都市を必要としたのである。かくして、表象化によって非暴力的強制力を持つことになった時間観念と空間観念



第4図 分析的理性による時間・空間的観念の更新

によって、世界内的存在である個としての自己を相対的に記号化し、空間観念を区画化(トポロジー化)することである。そのために、観念の更新のための仕掛けを人間は創出せざるを得なかった。つまり、時間を支配する舞台装置として王墓を、空間を支配する舞台装置として都市を必要としたのである。かくして、表象化によって非暴力的強制力を持つことになった時間観念と空間観念



	文明				文明の構造	集落の自立性	支配者の性格
第1地域	エジプト (1)	メソポタミア ア(2)	エーゲ(3) インダス(4)	ヨーロッパ (新石器)	変換可能構造	抑圧	政・経重視
			アナトリア (5)	インド (鉄器)	外来要素の受容		神格化の道
			メソアメリカ (6)	中国 (土=器)			
第2地域	中国(7)	エトルリア =ローマ (8)	ギリシャ(9) アルタイ(10) ケルト(11)		変換不能構造	強	祭祀重視 世俗化の道
			ペルー(12) スキタイ(13)				
第3地域			日本(14) スーダン(15) (クシュ)		衝突・構造変容		現実化の道
埋葬法	第4世代	第3世代	第2世代	第1世代			
都市	第3世代	第2世代	第1世代				

第5図 文化構造論による諸文明の類型
(注16論文を一部改変)

は、必然的に空間的に隔絶する他者と時間的に隔絶する他者とを生み出すことになった。それが世界に外在化する「森の王」であり、この異人を殺すこと、すなわち王殺しが、表象の異次元交換を拠り所とした世界の支配／規範を更新する唯一の手立てに他ならなかったのである。したがって、最初の王が神聖性をまもわなければならなかった所以は、王は世界に内在化する表象の交換体系に対して外在化する実在として成立しなければならなかったからである。王は階層化された世界の権威的諸関係の頂点ではなく、それから切り離された制外者として立っていたのだ。そして、対外長距離交易が王権の成立を促したのは、異人との接触が、表象の異次元交換を相対化させたからにほかならない。

だとすれば、文明によって王の社会的性格に変化が生じるのはなぜか。前稿では、変異を常に受容し、内在化できる変換可能構造である第1地域(オリエント中心)と、変異を常に排斥する反面、突然の変化を招きやすい変換不能構造である第2地域(アジア・ヨーロッパ中心)とを典型的に分別し、両者が見かけ上の表裏関係を構成して補完的に伸長することを指摘した。第1地域では王は神格化し、変換不能構造である第2地域では王は世俗化の道を歩む。この現象は、神聖性を表象する外なる世界との接触の多寡が、王の神格化の程度を決定付けたためと評価したい。つまり、これは、制外者としての王が外なる世界との接触が絶たれると、支配／規範のための制内者として世俗化し、専制的君主として世界を規制する実在へと転化することを、前稿の分析結果は意味していたのである。

5. 新構造主義(neo-structuralism)としての文化構造論

歴史の構造分析に基づき、歴史の物語論を超克するための作業概念とケース・スタディとしての王権の誕生について構造分析を試みた。繰り返して言えば、歴史は歴史的事実という部品を組み上げて創り出された伽藍ではない。主体的認識の暴力的作用を表象という非暴力的強制力へと転換し、その総体を世界の象徴として認識することこそが歴史の研究である。これは歴史が象徴の連続体であることを意味するが、その一方で、体系的な歴史の認識を否定しているのではない。将来の歴史研究にあたっては、個別的で多様な歴史の共存を包括するための歴史の哲学とは何かを模索していかねばならないのだ。

その方法の一つが象徴／構造の動態的な分析だと考える。従来の構造主義では構造変化に対する洞察は見られたものの、構造の静態的な分析に止まっていた。これは、伽藍を解体こそすれ、バザール(相互に通訳不可能な象徴)を結びつける働きはない。バザール間の交換手段と交換のための規則を決めることが必要なのである。そのために、交換のための手段としての表象、交換のための規則としての象徴／構造の動的分析を、一層、重視せねばならない。象徴／構造の動的分析によって、表象を見出し、それが多様な通訳不可能な象徴間を、異次元交換によって、結びつけることができるのである。ひいては、それが歴史の民主主義を進める道と見なすことができる。総括すると、歴史の民主主義とは、思惟の主体的営為としての歴史の共存を前提として、表象が本源的に保持する非暴力的強制力を、異次元交換によって抑制することで、相互に通訳不可能な象徴間を結び付けることとまとめることができよう。そのための方法は、おそらく一つではあるまい。

最後に、冒頭で提起した歴史の価値とは何かという問題に立ち戻ろう。従来、数学的に説明される自然現象とは異なり、歴史的事実は一回起的なものであると考えられていた。そして、自然科学と人文・社会科学とが論理的に同型構造であると見なす誤謬は、前世紀以来の科学的思惟の越えられなかった限界でもあった。しかし、ひとたび歴史は象徴の集合的実在であると見なすことによって、科学は象徴／構造の認識方法として合一される。その一方で、民主主義的な歴史とは、主体的認識によって捉える以上、何度も読み出し、書き直すことが可能な象徴の集合的構造である。新構造主義(neo-structuralism)としての文化構造論は、そのための展望を示唆しているのである。

(かわの・かずたか＝当センター調査第1課資料係調査員)

注1 Eric. S. Raymond' The Cathedral and the Bazaar' 1997. 本書は、コンピュータ・ソフトウェアのオープンソースとフリーソフトウェアの開発について述べた論文である。伽藍とは、少数の天才が伽藍を造り上げるように、ソフトウェアを作ることを比喩したもので、一つ一つ慎重

に組み立てていくことが大切であり、通常、完成するまでは姿が現れない。一方、バザールモデルというのは、常に多くの人々が入り出るバザールのような環境の中で、開発が進められることを指す。この指摘を歴史研究に援用することが本稿の目的の一つであるが、そのためには、実在としての過去および歴史を問題にすることが必要である。

- 注2 歴史的現在を考定するためには、過去の実在を前提にせねばならない(野家啓一「過去の実在再考」(『新・哲学講義』別巻 哲学に何ができるか) 1999)。過去の実在の分析は、歴史の「物語論」として相対化されるが、それを超克するための方法の一つが歴史の構造主義的分析であると思う。かつて、私は「文化構造論」と題して、相対としての歴史認識を唱えたことがあったが、本稿はそれを土台に、理論的な局面に焦点を絞って述べたものである。
- 注3 主体的環境とは、主体的認知のために対象化された異次元的な環境を指し、主体的環境への身体的手段の創造こそが歴史の実在を規定するための条件となる(フッサール(渡辺二郎訳)『イデーンI-I』 1979)。
- 注4 『アナル』編集部「アピール 歴史と社会科学—批判的転回?—」(ジャック・ルゴフほか『歴史・文化・表象』 1999)
- 注5 直線的时间観念が王権と軌を一にして発生したことは、野島 永によって指摘された(野島 永「王の時間」(王権研究会発表資料 2000.3.10)および本論集所収)。さらに言えば、直線的时间観念の成立には空間認知が相対化されることが必要と、別の所で述べたことがある。
河野一隆「東アジアにおける厚葬墓の誕生」(『弥生王墓の誕生—弥生社会の到達点—』第5回加悦町シンポジウム資料) 2000
- 注6 歴史が読み出し可能な象徴の連続体であるならば、象徴を分析的に抽出することも歴史研究の重要な一要素である。ルース・ベネディクトの指摘する「文化の型」も象徴の一種であるし、実在としての文化そのものが象徴である。また、私は別稿で王権発生期の象徴として「神聖性」を捉え、神聖性の異次元交換の現象形態として「威信財経済」を捉えている(注13・16参照)。
- 注7 永原慶二「戦後日本史学の展開と諸潮流」(『岩波講座 日本歴史』24 別巻1 岩波書店) 1977
- 注8 国民的歴史学運動は戦後歴史学の方向性を決定付けた点で、重要なムーブメントであり、神話に彩られた古代社会像を史的唯物論による民衆の歴史として描き直した。
- 注9 史的唯物論ならびに観念論的な世界史の構想は、直線的な時間観念に縛られているという意味において、「科学」であった。今世紀後半に主調となった、トーマス・クーンによる科学革命の構造分析は、科学の歴史化であると同時に、歴史主義の到達点を示すものでもあったのだ(トーマス・クーン(中山 茂訳)『科学革命の構造』1971)。なぜなら、科学と歴史とは、論理的に同型の構造として仮定されていたからであり、後述するように、それが両者の言説を見かけ上類似したものとして現出させていたからに他ならない。
- 注10 歴史の総体的な認識が可能か否かは、実在としての過去を捉えるための方法に由来する。歴史学とは、実在としての過去を分節化するものではなく、歴史の哲学を追求することによって過去への実在が投げ返されるのである。このメカニズムを追求するための作業概念を表象/象徴と規定している。

- 注11 今村仁司『暴力のオントロジー』 1975
- 注12 排除の論理によって社会的自己同一性が獲得される所以は、後述するように、社会と個としての人間が共有することで発生する疎外を、恒常的に身体外的手段へと変換するための理性の働きに基づいている。
- 注13 河野一隆「森の王」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注14 後述するように、予測・認識・記憶の3者が行為として合一が可能であるのは、実在としての主体による理性の働きのためである。
- 注15 嶋田義仁『異次元交換の政治人類学 人類学的思考とはなにか』 1993
- 注16 河野一隆「副葬品生産・流通システム論」(『中期古墳の展開と変革』第44回埋蔵文化財研究集会資料) 1998
- 注17 岡 正雄『異人その他』(『民族』第3巻第6号) (岡 正雄『異人その他 日本民族=文化の源流と日本国家の形成』 1979に再録)

付記 以上の問題提起に基づいて、world proto-history の中で表象の考古学の可能性を別稿(「表象としての神聖王権」(『表象としての鉄器副葬』第7回鉄器文化研究集会資料) 2000)にて模索し、本稿では議論を深めることができなかつた世界システム論との関連を論じたことがある。本稿は、表象の考古学の理論的枠組みを中心に論じているが、佐藤啓介(「表象の基本構造について」(上掲書所収)のマッチング・逆マッチングの指摘が十分に生かされていない。さらに、システム論的な世界認識におけるpositive feedback と negative feedback への言及もできていない。結論から図式的に言えば、positive feedback とは表象の拡大再生産につながる逆マッチングであり、negative feedback とは表象を互いにうち消しあうマッチングに該当する。この点はさらに検討を詰める必要があり、改めて議論したい。